

新春パノラマ

医療落語

熊さん、縫うほどじやねえ!

発声 井亭 長大

前号からの続き……

「そもそも臨床検査技師の業務とは、法律で示されている微生物学的検査、血液学的検査、病理学的検査、寄生虫学的検査、血清免疫学的検査、生化学的検査、尿検査、生理学的検査、などだな」

「臨床検査技師はこのような仕事を病院などの医療機関や保健所または企業などで行い、信頼性の高い検査データを迅速に医師へ提供することで病気の診断、経過の観察、健康診断に多大の貢献をしているって訳だ」

「たいそう大事なことをしてなさるんだねえ、あつそう一つ聞いていのがねえ、この前大工の組合で健診があつたんでさ、そこで腕から血を取られた時短いやら長いやら何本にも分けてやしたが一本ですまないんですかね」

「そうそう。あれはな血液が固まった上清でする検査、血液を固めずに行う検査などがあつて入れ物が幾通りかに分かれているんだな」

「そういうことですか、ついでに検査の名前なんぞの話も伺いてえんですが、あの総ステテコ何とこつてあるでしょあれあれ」

「それを言うなら総コレステロールだな、なにもっと話が聞きたい、えつ家へ帰っても一杯やって小便して寝るだけだから、うんうんわかりました。もう少し話を続けましょう。まず生化学的検査から、GOT、GPT は肝機能、 γ -GTP はアルコール性肝障害、尿酸は痛風、血糖・ヘモグロビンエーワンシーは糖尿病、コレステロール中性脂肪は動脈硬化、クレアチニンは腎疾患でな具合だな」

「そういえば、この前糖尿病の疑いありつて言われたんですが別にほつともいいんですよね」

「いやいや血糖値が高いままほつておくと、何年か後に合併症になる恐れがあるんだな」

「ガッペイね、あの中華街で売つてる胡桃をあしらつた甘さほどのお饅頭……」

「それは月餅だよ、合併症つていうのは、中途失明の原因ナンバーワンの目の病気糖尿病性網膜症、

透析導入の原因ナンバーワンの糖尿病性腎症などの重い病気のことだ」

「お次は血液検査、赤血球・ヘモグロビン・ヘマトクリット・白血球に血小板などがあり貧血の検査で知られているな。続いて尿検査は糖や蛋白。それから輸血検査、これは輸血をするときに副作用のないように血液型や交差適合試験という検査をするんだ。細菌検査というのもある。これは例えば O157 などの食中毒や淋菌やクラミジアなどの STD と呼ばれる性感染症を調べる検査だな」

「えへへ、恥ずかしながらちよいと前に吉原で病氣しよつちやいましてね。えらい目にあつちまつたんですが、じや、あつしもその時細菌検査とやらにお世話になつてんですね」

「そういうことだな、それから病理細胞診検査、これはガンの診断などに直接関係する重要な検査だな。この他に生理検査がある。これには不整脈や心筋梗塞などの心臓疾患を診る心電図、臓器の形や動きを診て診断に役立てる超音波検査、それから脳波検査、平衡機能、聴覚検査、呼吸機能検査、神経、筋機能検査がある」

「いやあいろんなことをやつてるんですね」

「そうだな、臨床検査技師は病氣を見つめる科学の目であるこのような検査を行い、みなさんの健康管理のサポートをしてるんだな」

「いや先生のお話でよくわかりやした」

「それからお花さんが資格を取つたら検査技師会に入るように伝えておくれ。いやそれはな、技師会は先進的な改革を次々と打ち出しているんだ、スーパー検査技師構想というものもある。別にこれはスーパーつてたつて生鮮食品の管理つてもんじやない。ドイツのマイスターのように優れた技術と見識の高い人材を育成しようというものだ」

「なんだかあつしには難しいけどお花には伝えておきます」

「熊さんせつかく来たついでに採血して帰るかね」

「そうですね、血糖も気になるんでやつてもらいやすか」

「おくりおつかさん、出てきて採血頼むよ」

「なんですか、先生のお袋さんが、看護婦の第一期生ですか、それで採血は進駐軍の病院でマツカーサーにやつたのが最後だつて、おおい大丈夫かな、そんでもつて手が震えてるよ先生、代わつてくださいよ」

「やつぱり駄目かね、冥土の土産に採血をと思つたんだが、では私がやるか」

「先生、やりましようはいいけど、いきなり注射器持つて、やだなあ普通アルコールで消毒してからするんじやないですか」

「アルコールねえ。そんなものはうちにはないな」

「ひでえなあ、病院でしよう。ないものはないつて、あつそう、ないんじやしようがない。じや水でささつとふくだけでもいいや、水でお願ひしますよ」

「お願ひしますつて、自分のことは自分でやらんか」

「やりますから水はどこにあるんですか」

「そのすみみにある醤油だるの中だ」

「ああここね、いやどうでもいいけど、きたないねえこの水は。底が全然見えないですよ」

「そうだろうな、一度も取り替えたことがないからなあ。もつともたまには足してはいるけど」

「じやがねえなあ、あつ先生これボウフラがうようよ、浮いてますよ。これじや水がすくえないですよ」

「あつそれな、こつがあつてな、横のヒシヤクそうそうそれでな、たるの端をトンと叩くと一瞬ボウフラがすうつと沈むからその隙にさつと水をすくうんだ」

「じやがない、こつまでくればやつてみますが、ヒシヤクでトンと叩くとすうつと沈む。トンと、あつ本当だ沈んだね、またすぐ戻るね、トン、トン、あつこりやおもしろいや。じや次ですくつてみようか、トン叩いたこの隙にさつと水を、あつすくええたね。この水で腕をさつと拭いてと、さつ先生お願ひしますよはいいけど、今度は針がひどく錆びてませんか」

「少し錆びたほうが鉄分が入つて貧血にいい」

「もう何でもいから、目をつぶつてるんでひとおもいにお願ひしますよ、あつ痛えつ入つたすか、ええつ失敗したからもう一回つて、痛つ、また失敗つて、痛つ、刺したり抜いたりもう勘弁してくださいよ、あつこんなに血が出て、腕じゅう傷だらけですよ先生、大丈夫ですか」

「安心しなさい、縫うほどじやねえ」

「お後がよろしいよう……」

完

発声 井亭 長大

師匠をご紹介しします。

横須賀市立市民病院に勤務されている

徳留公英さんです。